

第二節 世界大戦と景気

一 全国的な傾向

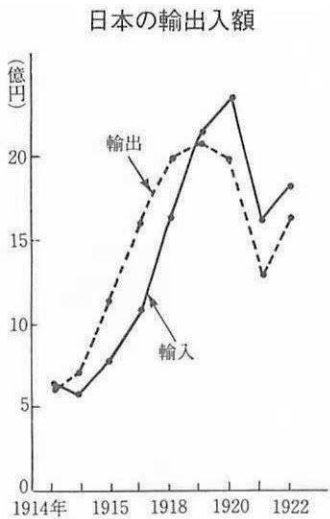
(一) 沸き立つ財界

大戦勃発の当初、日本は不況のどん底にあった。しかし、大戦が進展するにつれ、連合国からの軍需品や日用品の発注が多くなってきたうえに、東南アジアやアフリカなどからの需要も増大してきた。このため、開戦翌年の大正四年（一九一五）のころから、日本の輸出は非常な活況を呈してきた。大正四年の輸出貿易は未曾有の盛況で、その総額は七億八〇〇〇万円にのぼったが、翌五年は一億二七〇〇万円、六年には一六億二〇〇万円、七年には一九億六二〇〇万円と、うなぎのぼりに増大していった。一方、輸入額はさほどふえなかったから輸出

超過額は莫大なものであった。

海運の需要もふえ、日本の船会社が外国から受けとった運賃や用船料も激増した。このため海運・造船・鉱業界のあげた利益は空前の巨額に昇ったのである。戦前は一〜三割の利益率だった。これらの業界が、大正七年の下半年には一七〜一九割の利益率を公表したというのだから、いかに莫大な利潤をあげたかが想像できよう。

大小無数の戦争成金が輩出したのはこのころであった。まさにヨーロッパの大戦は日本にとって「天佑神助」であったのだ。日本が近代的な工業国家に成長したのも、この大戦によるところが大であった。

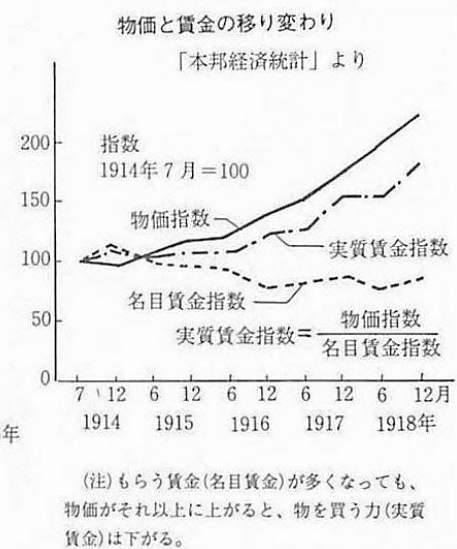


大正三年、日本の農業生産高は一四億円、これにたいして工業生産高はやや下まわって一三億七〇〇〇万円であった。それが大正八年になると四一億六〇〇〇万円―六七億四〇〇〇万円と逆転したのである。産業の発達は大資本家をますます太らせていった。事実、この大戦で日本の資本主義体制はめざましく強化発達した。大正三年に払込み資本金五〇〇万円以上の会社は全体の〇・三七パーセントにすぎなかったのが、大正八年には一・七七パーセントに急増している。

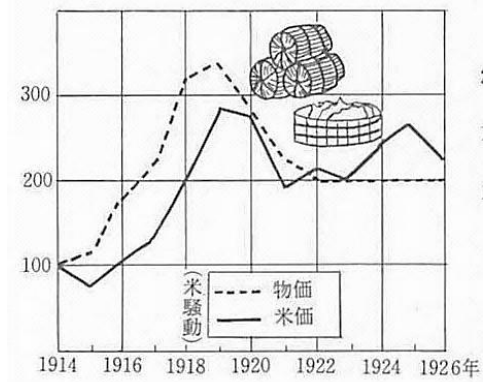
このころ、成金たちが有頂天のあまり、なかにはロクソクのかわりに百円札に火をつけて明りにしたとか、客を招待するのに数百畳じきの座敷をもつ御殿を建てたとかいったたぐいの、ばかばかしいような実話が伝わっている。

(二) 物価の暴騰

しかし、成金がわが世の春を謳歌している一方で、庶民は空前の物価騰貴のために生活苦に喘ぐ羽目になるのがあった。大正三年の物価指数を一〇〇とすれば六年には一七九、七年には二三〇、八年には二四八、九年には



米価と物価の上昇 (1914年を100とする)



▲激しい物価の上がり方 わずか3、4年のあいだに物価が3倍、米価が2倍にもなっています。

景気の波がおしよせてきた。軍用品の注文がなくなったうえに、ヨーロッパ諸国の経済が平常にもどってしまったためである。輸出は目に見えて減って、株の相場が一挙に暴落した。せっかく工場をひろげて機械を増やし、大量生産ができるようになっていたのに、品物の売れ行きが止まったために、使えない設備と大きな借金をのこして倒産する会社が続出した。

産業の発達と好調な輸出、増える一方の海運などの収入でもたらされた好景気は、すべて第一次世界大戦のおかげだった。だから、戦争が終われば、景気がくずれるのはさげられないことだったが、それにしても、そこでぐつとふみこらえることができなかったところに、日本経済の底の浅さがあらわれているといえよう。

大正七年一月の白米一升の小売価格は三〇銭、それが二月二三銭、三月二三二銭、四、五月二三三銭、六月二三四銭、七月二三六銭と漸騰、八月にはついに四五銭までハネあがったのである。

二七三と、急騰をつづけ、物価は戦前のほぼ三倍になったのである。前代未聞の物価騰貴で企業家のつかんだ利益は莫大なものであったが、一般民衆の賃金や月給の値上がりは物価騰貴にはるかにおよばなかった。大正三年の東京賃金指数を一〇〇とすれば、七年のそれは一五七である。七年の物価指数は二三〇であるから、実質賃金は大正三年の一〇〇が四年後の七年には六八に低下したことになる。また下級官吏である判任官の実質月給指数は、同じ年間に五三・五まで低下している。これでは、労働者やサラリーマンの生活が困窮してくるのは当然である。これは農民にとっても同様であった。他の商品の価格が暴騰していたのに、生産米価は大正六年のはじめまでほとんど騰貴の勢いを示さなかったのである。生活苦はひしひしと国民の上のしかりつつあった。こうした背景がのちの「米騒動」への導火線となるのである。

(三) たちまち不景気に

第一次世界大戦は大正七年(一九一八)に休戦が成立した。その後、一年ほどはまだ戦争景気の余熱のようなものがこつていたが、一九二〇年になると、大きな不

二 奄美における動向

(一) 紬景気

当時の大島は、大正三年(一九一四)ぼつ発した第一次世界大戦をきっかけに大島紬の全盛期をむかえていた。大正四年の一反一〇円か、大正六年には一八円に、大正七年には二三円に、大正八年には三七円に急上昇し、織りさえすれば売れる。通帳一冊で飯がくえる。「ビールで足を洗う」時代が到来した。紬取引目当てに、第四十七銀行(鹿児島銀行の前身)大島支店ができたのが大正六年九月、九年には鹿児島商業銀行支店も設立され、大島紬の荷為替取引、担保貸し出し、割引手形貸出しなど活発に行われた。

また、伊仙町(当時島尻村)の記録によれば、大正六年には三七七反で七五三六円(一反二〇円)、七年には六〇三四反で十五万八五〇円(一反二五円)、八年には七一六〇反で二十一万五三八〇円(一反三〇円)と値上り空前の紬景気となった。当時紬織子の賃金は一日四十銭

で、一般労働男四十銭から五十銭、女二十五銭から三十銭に比較して家にすわりながらできる紬織りは女にとって大きな魅力であった。

(二) ゆり景気

沖永良部においては、ゆり栽培の面から見ることにする。小林正芳著「沖永良部島におけるテツポウユリ栽培六十五年史」による。

大正二年（一九一三）

ユリ根販売価格の上昇により、沖永良部島は好景気となる。

大正三年（一九一四）

ユリ根がよくできて、ユリ景気で島はにぎわい、沖繩芝居やサーカスが来て活気にあふれた。価格は六寸球三銭、七寸球五銭、八寸球七銭、九寸球九銭、尺球十一銭で和泊村の売上高は一六八万三千球で八万四千五百五十円になり、その主な栽培地は和泊・手々知名・喜美留で生産額から見れば、黒糖に次ぐ移出品として大きな伸びを示した。

大正六年（一九一七）

大正元年より大正9年までの和泊村の生産実績

年次	作付面積(ha)	収穫高(球)	10a 当り球数	生産額(円)
大正元年	19.50	489,060	2,508	9,782
2	36.60	732,000	2,000	18,300
3	30.60	1,683,000	5,500	84,150
4	52.00	2,930,730	5,636	26,376
5	50.40	3,276,000	6,500	16,380
6	37.10	1,855,000	5,000	9,275
7	10.10	404,000	4,000	362
8	11.30	135,600	1,200	87,984
9		869,700		60,879

重要輸出品の種類にユリが加えられた。

大正七年（一九一八）

世界大戦により米国が輸入禁止をしたため不況になり、ほとんど取り引きされなかった。

大正八年（一九一九）

米国が輸入禁止を解除したので需要が増大したが、島の生産量が需要数に不足したため、商人の競買となり、五寸球六銭、六寸球以上平均二十銭、九寸球以上三十銭と大変な高値で取り引きされた。

大正九年（一九二〇）

前年とは逆に六寸球五銭、七寸球七銭、八寸球九銭、九寸球以上十三銭と安くなった。

(三) 経済恐慌

大正九年（一九二〇）三月の株式市場の暴落にはじまった恐慌は、つづいて商品の大暴落となり、綿糸・織物・生糸など軒並みに低落し、大島紬は大正一〇年を境に、稠落の下降線をたどった。手をひろげすぎた紬業者は何の対策をするいとまもなく倒産するものが相つぎ、価格下落と売行き不振のしわよせは、織工の賃金不払い、賃下げとなって生活をおびやかした。大島紬の値段は目に見えて下落し、一夜あけるごとにガタおちし「当時の大暴落は一反一五円になっても買手がなかった」そのため製品を売っても糸代も払えない状態が続いた。織工の生活は悲惨で多くの借金をかかえ、嫁入りにダンスや鏡台

のかわりに家の借金を背おって嫁ぐ有様だった。

砂糖の相場も、大正九年五月の百斤当り、二九円五六銭が、十一月には一五円三四銭と四割に下り、一〇年五月には一〇円八六銭、六月には九円九四銭とあれよあれよという間に下り「甘蔗一反歩の収入は、七九円七九銭にすぎないのに、栽培費四三円四〇銭、製造費五四円、計九七円四〇銭を要し、二二円の損失だ」と政府に救済を訴えた。砂糖の値段も、昭和五年の農業恐慌でさらに下り、昭和六年の砂糖相場は一丁八円、九円代にさがり、紬の不況とかさなり「ソテツ地獄」といわれた。

なお、近藤大島支庁長は当時の状況について次のように説明している。

大島経済は大正八年頃までは大体二十八万円程度のものであったがその後時運の進歩と財界の好況の結果が九年には一躍して四十万円に近き予算に膨張し今日四十四、五万円の間である。然るに十一年頃より形勢は急転直下して不況のため事業者といわず農家と商店といわず大なる打撃を被り、延いて納税の成績不良となり、やむなく課税率を低下せねばならなくなった。殊に主要産物の紬が好況時代には千二百万円乃至千四百万円の移出が

あつたのに、相場は下落に下落を続け、今日は半値にも達せぬ惨めな状態である。

次に町村方面では小学校教員俸給支払状態が悪く、郡内一町二十ヶ村のうちに満足に俸給を支払い得る村は七ヶ村に過ぎず、余の町村は或いは二ヶ月、三ヶ月、甚しきは四ヶ月も支払う事が出来ぬ実情で、如何に自治体が財政上困っているのかは窺知される。

牛の数も数年前までは一万五千頭であつたのに、本年昭和三年は漸次減少して一万五百頭となっている。之は他に売つて金にする品物が無い為に、最愛の牛を売却した結果である。地所の如きも売つて了うから自作農から小作農へ移る者の数も多い。

伊仙町誌の記録によると大正七年の七月の全国米騒動、同八月二十四日の住用村西仲間で起つた米騒動の反響は大きく、県や米穀商組の協定で各村の白米一升が三十三銭となり、唐白米が一升二十四銭となつたが、徳之島でも同様値段で売られた。とあるので沖永良部においても同様の値段であつたものと思われる。一般労働の男子の一日賃金が四十銭〜五十銭であるのに比較すると、いかに米価が家計を圧迫したか察するに余りあるものがあ

る。

このような生活にたえかねて、出稼ぎに阪神地方へ行く者が多かつたということである。これらの者は、たいして技術を持っているわけでもないのに、女子は紡績へ男子は肉体労働へと流れて行つた。

このような不況は関東大震災によつて追い打ちをかけられ深刻の度を加え昭和時代へと進んだのである。

奄美においても「昭和二年の天皇行幸」を記念して、「昭和一新会」「自力更正」等の精神運動とともに、県・国においても「大島郡振興計画」を実施するようになったのである。